
ありがとう・・・

夏雪 帝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ありがとう……

【コード】

N5035G

【作者名】

夏雪 帝

【あらすじ】

立海の卒業式の話。赤也は、卒業していく先輩達を見て、これまでの思い出を振り返っていく……

(前書き)

ギャグではありません

3月、卒業の季節・・・。

今日、ついに先輩達はここを卒業していく・・・。

今、俺達在校生は体育館で卒業生の入場を拍手で迎えている。

すでに泣いてる奴もいれば、ニヤニヤしている奴もいる。

そんな中で俺は、入場し終えた卒業生が、着々と自分達の席に座っていく姿を、ただじっと眺めていた。

• それにしても、大勢の人達がいる中でもあの人達は一際目立つ・・・

何だか、

先輩達の背中がとても大きく見えた。

「卒業証書授与」

教頭のアナウンス。

「3年A組・・・」

担任の声。

次々と呼ばれる生徒の名前。そして・・・

「真田 弦一郎」

「はい！」

副部長らしい、威厳のあるキレのいい返事だった。

壇上が上がっていく副部長の後ろ姿を見て、これまでの先輩達との思い出が鮮明に蘇ってきた・・・。

『赤也！部活に遅れるとは何事だ！』

『げっ！真田副部長！』

『たるんどる！！』

『すみません！！』

殴られたこともたくさんあった。でも・・・

『すみません！俺・・・負けて・・・！』

『・・・座つてろ。』

副部長は、厳しかった。そして、優しくかった。そしていつも頼れる先輩だった。

「柳生 比呂士」

「はい！」

柳生先輩らしい、紳士的で優しい返事だった。

『柳生先輩〜！』

『どうかしましたか？切原くん。』

『英語教えてく〜ださい！』

『しょうがないですねえ・・・』

いつも、優しくかった先輩・・・ただテニスにかける思いは誰よりも強かった。

『切原くん。反省したまえ。』

柳生先輩は本当に立海が好きなんだ……そう強く感じた一言だった。

「3年B組……」

「仁王 雅治」

「ム」

……仁王先輩らしい相変わらずワケのわからない返事だった。

『赤也！知つとるか？真田は、実は年齢詐称しとるぜよ。』

『ええー！やっぱしー！』

『ほう、それはどういう意味じゃ？』

『だって、明らかに中学生じゃないツスよ！あの顔は！』

そんな部活中の他愛のない会話がものすごく楽しかった……でも、先輩はいつもふざけてるわけじゃなかった……

『(忘れものとか、俺ついてねえ〜)』

パソコン、パソコン

『(この音・・・こんな遅い時間なのにだれか居るのか?)』

『まだじゃ・・・もっと強くなるんじゃ・・・!!..!』

一人で練習してる先輩を見たとき、俺は本当にカツコ良いと思ったんだ。

「丸井 ブン太」

「はい」

丸井先輩らしい、大きいとはいわないけど、良く通る返事だった。

『おい、赤也！ケーキ屋行こうぜ!』

『ええー・・・俺あんまり行きたくねえなあ』

『おごってやるぜい?』

『行く!行くッス!!..!』

先輩はいつも、なんだかんだ言いながら俺に構ってくれた・・・

『どう？天才的？』

『いや、んー・・・まあ天才的なんじゃないんすかねえ？』

『何だよ、それ！』

『俺のほづがきつと天才的ツスよ！』

嘘ツスよ。先輩は本当にすごいと思うツス。天才的でしたよ。

「3年C組・・・」

「幸村 精市」

「はい！」

さすが立海の部長。誰よりも、力強く凛とした返事だった。

部長が倒れたとき、何が何だか分からなくなった。ただ、試合に絶
対負けてはならない・・・それだけしか頭になかったんだ。

……だけど、俺は負けてしまった……。
悔しくて、申し訳なくて涙が溢れ出した。

『すみませんっ……した……部長……!』

『泣くな、赤也。負けたのなら、相手に勝てるだけの努力をすればいい……そうだろう?』

『っ……はい!』

部長は優しくかった。病み上がりで大変だったのに……いつ
も練習に付き合ってくれた。

でも、さすが部長……副部長よりも厳しかった。

練習中に聞こえる、部長の声。

『赤也、動きが悪いよ!』

『はい……!』

でも、一度もその声を嫌だと思ったことはなかった。俺は単純に、
部長とまたテニスが出来るといふ事実が嬉しかったんだ。

「3年F組……」

「柳 蓮二」

「はい！」

柳先輩らしい、冷静で堂々とした返事だった。

何かと先輩には迷惑をかけた。勉強も……部活も……

『先輩！今回のテストなんすけど……』

『赤点の確率95%だな』

『うへえ〜やっぱし』

『勉強をしなかったお前が悪いんだぞ。』

そういうくせに、先輩が前に使ってたっていうノートとかを俺にくれた。……そして俺が、スランプのときも……

『赤也、なにも焦ることはない……お前には十分実力はついている。』

『……でも！』

『変えなくてはいけないのは、お前の内面だ。』

『内・・・面？』

『ああ、お前の気持だ。』

そう言った先輩は微笑んでいた。
こんなふうにはアドバイスをくれる先輩を本当にすごいと思った。

俺には絶対できないことだから・・・

「3年I組・・・」

これで、最後・・・

「ジャツカル桑原」

「ハイ！」

ジャツカル先輩らしい、はきはきとした体育館に響く返事だった。

先輩といると本当に楽しくて、上下関係なんて気にせず毎日笑いたった。

『ジャツカル先輩、これから遊びに行きませんか？』

『おお！良いぜ！どこに行くんだ？』

『そんなの、ゲーセンに決まってんじゃないスか！！』

『おいおい、またかよ！』

ジャツカル先輩は、まるで俺の兄貴みたいで居心地がとても良かった。兄貴がいたらこんなだろうなあって……

だから、いつも一緒にいたから……人一倍迷惑をかけた。

『お前、潰すよ』

『赤也！やめろ！』

『離せよ！ハゲ！』

『どうせ俺はハゲだよ！だがな、今はそんなこと関係ねえ！ほら、

行くぞ！』

そんな俺のことをいつも止めてくれた。殴ったりしたときもあったのに、次の日になると先輩はいつも笑ってた。

俺は、ゆっくりと自分の席に着く先輩を眺めながら思った。

ああ・・・

明日から、先輩達はここにはいないんだ・・・

「・・・」

気が付くと、涙が頬を伝っていた。

「(んで、泣いてんだよ・・・)」

でも、止めようとしても涙はでてきた。

「(くそ・・・泣かねえって決めてたのに・・・)」

どつやら俺は、自分が思ってる以上に先輩達が好きみたいだ。

本当は、祝わなくちゃいけないのに・・・

まだ、一緒にいたいなんて・・・

俺は涙でゆがむ先輩達の背中を見ながら

今までありがとう

さよなら

と、心の中で感謝の言葉を繰り返した。

先輩達、俺いまだけ泣いても良いッスか？

見送りのときは、泣きませんか。

そのときつと笑顔で、言えるはずだから……

『先輩達、卒業おめでとつございます！』

つて……。

(後書き)

読んでくださってありがとうございました。

駄文で申し訳ありませんが、初めて書いたので許してやって下さい。

立海の卒業式ということ、赤也は絶対泣くようにしたかったので
すが・・・コミヨールですね。

小説書くのもっと頑張っていきたいと思います。

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5035g/>

ありがとう・・・

2010年10月9日18時29分発行